

句の説明の予測

—— 予測の読みの一側面 ——

1 はじめに

ある読み手が文章を理解しようとする際に、次に来る内容を予測しながら理解しているということは、最近の研究によって自明のことになりつつあると考えるとよいと思われる。もし予測がおこなわれていないとすると、読み手が短時間のうちに文章を読んで理解できるのはなぜかという問いに答えることができないし(寺村一九八七、庵一九九九)、ユーモアエッセイやショートショートなど、読み手の予測を前提とし、それを外すことよってある種の表現効果を得ている文章も理解できないことになるからである(石黒二〇〇一a、二〇〇一b)。また、日本語教育の分野に見られる、日本語母語話者、日本語学習者に対しておこ

石 黒 圭

なった調査においても、母語話者の持つ、すぐれた予測能力の存在は裏づけられている(酒井一九九五、大野他一九九六、杉山他一九九七)。

したがって、現在の研究の課題としては、読み手が予測をおこなっているという事実を前提に、その予測がどのようにおこなわれているかを解明することにある。論者はこれまで、文を単位にした予測のしくみを明らかにするという課題に取り組み、今読んで理解している文、すなわち当該文から、次に続く文、すなわち後続文を予測する仕方、当該文と後続文の接続関係から考えて、①理由、②句の説明、③格成分の説明、④結果、⑤逆接、⑥並立の六つあるということ論じた(石黒一九九六)。そのうち、①理由については石黒(一九九八a)で、③格成分の説明につい

(49) 句の説明の予測

ては石黒(二〇〇一c)で、⑤逆接については石黒(一九九八b)で、⑥並立については石黒(一九九九)で、それぞれすでに明らかにした。残るのは、②句の説明と④結果の二つであるが、本稿では前者、すなわち句の説明の予測を扱うことにする。なお、ここでいう句は、国語学で一般にいわゆる句、つまり文または文に準じる単位(英語学でいうclause)を指している。

当該文から句の説明の予測が誘発されるためには、当該文が何らかの意味で抽象性を備えていなければならぬ。当該文が備えているその抽象性をここでは大きく二つに分けて考えようと思う。

一つは、事象の概括的把握である。この事象の概括的把握は、典型的には形容詞述語文に見られる。たとえば、「今日は楽しかった」という表現は、一日中ずつと楽しかったということを保証するわけではない。日曜日に御殿場にハイキングに行った帰り、東名高速が渋滞して帰りが遅くなったかもしれないのである。しかし、抜けるような青空のもと、都会の喧噪を離れ、豊かな緑の中を家族みんなで歩き、心地よい汗を流し、おいしい空気を吸い、山頂でお弁当を広げ、といった昼間の体験が脳裏に焼きついて

いれば、渋滞のせいで、夜遅く疲れ切つて家に帰りついたとしても、家の中でほっと一息ついた瞬間、「ああ、今日は楽しかった」ということばが口をついて出てくるものである。このように、形容詞による把握は、細部にわたって検討した場合、そうした把握にそぐわない部分が出てくるものだが、全体としてだいたい合っていれば当該の形容詞で事象をとらえるものである。概括的な把握というゆえんである。しかし、こうした把握は、表現主体が感覚的にとらえた大雑把なものなので、その把握を、実感をともなうて理解主体に伝えるためには、具体的な例による裏づけが必要になる。そのとき句の説明の予測が働くのである。

もう一つは、関係の漠然性であり、名詞述語文に典型的に見られる。名詞述語文は、その関係のあり方によって、予測を引き起こさない場合、理由の予測を引き起こす場合、句の説明の予測を引き起こす場合の三つに分かれる。

係助詞「は」によって結びつけられる前後の関係の妥当性が高い場合は、予測を引き起こさないのが普通である。「政治は社会科学の一部である」という文は、政治は経済、法律などとならんで、社会科学の一分野を構成しており、その意味で前後の関係の妥当性が高く、句の説明の予測を

引き起こしにくい。しかし、「政治は経済の一部である」といった場合、政治と経済は別の分野であると一般に考えられているため、それに反する結びつきは、「どうして政治が経済の一部になるのか」という理由の予測を誘発しやすい。一方、「政治は時代精神の一部である」という文は、この結びつきが常識と適合するかどうか以前に、「時代精神」の意味が不明確であるため、結びつきそのものがはつきりしない。そのため、読み手は「政治が時代精神の一部であるとはどういうことなのか」という疑問を抱きつつ、その意味を明確にしてくれるような具体的な例が後続文に出てくることを期待して読み進めることになる。このように結びつきそのものがはつきりしない場合、その漠然とした結びつきに具体的なイメージを付与するという意味で、句の説明の予測が働くのである。

2 研究の方法と資料

1章で述べたように、本稿での予測は文を単位にして考えている。用例の中で、当該文には下線を付し、当該文を理解した結果、予測できた後続文には破線を付すことにする。予測には、当該文だけでなく、当該文までの文脈も影

響を与えている。したがって、そのような文脈がないと予測が困難になる場合、当該文の直前にある先行文もあわせて提示することにする。また、本文にない表現で補足説明をおこなう場合、(一)に入れて示すようにする。

実際の作業手順は以下の通りである。

① 作品の冒頭の1文(≡当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。

② 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

① 作品の冒頭の1文(≡先行文)の内容は既に頭に入っている。

② 冒頭文の次の文(≡当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。

③ 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

(以下同様の操作を繰り返す)

① 作品のn番目の文(≡先行文)までの内容は既に頭

に入っている。

② n+1番目の文(＝当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。

③ 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときそれを記録する。

すべての対象資料で、作品の結末までこの作業を1文ずつ順に繰り返す。以降の用例は、その作業の結果得られたもののうちで、句の説明を予測したものについて、整理、分類を施したものである。

予測は、目に見える事態を描写する描写文と、論理を組み立てて説明する説明文とではその実態が大きく異なり、また、筆者の個性によってもかなり左右されるため、描写文を代表するものとして原爆小説のアンソロジーである『何とも知れない未来に』を、説明文を代表するものとして雑誌『世界』に掲載された論文のアンソロジーである『世界』主要論文選』を、それぞれ資料として用いることにした。

3 事象の概括的把握によって生じる予測

3-1 事態の概括的認識

すでに一章で触れた、典型的には形容詞に見られる事態の概括的認識である。形容詞は事態を感覚的に大雑把に捉えるため、読み手はその形容詞の内実を予想することになる。形容詞であれば、感情形容詞であっても、属性形容詞であっても、また、イ形容詞であっても、ナ形容詞であってもよい。さらに、形容詞だけでなく、(2)の「はつきりしている」のような形容詞に近い意味を表す状態動詞のこともある。

(1) とくにここ数年の財政危機の影響は深刻であります。

高度成長にともなう租税収入の伸びを前提とした個別対応型の施策は壁につき当たって、新しい理念に基づく施策の体系化、プライオリティの選択がきびしく求められています。(世七九九頁)

(2) 論壇に目をうつすと、幸いなことに、三大紙の論調ははつきりしている。崔大統領辞任にさいして、『朝日新聞』の論説は、漸進的な民主化を約束していた崔大統領が任務を果たさず中途退陣したことを「意外」とし、これが「三金氏の排除にみられるように、力を背景にした政治指導者の交代という印象はぬぐいがたい」と、やんわりと批判している(八月一七日)。「毎

「日新聞」の論説は、「韓国の行方に憂慮を深める」と題して、金大中裁判にかんする伊東外相の立場を支持すると表明し、「全斗煥委員長の政治を、朴正熙体制の再演とする見方がある。(中略)全委員長が今後とも同じ道を歩んだのでは、抑圧政治を繰り返し、悲劇的末路をたどることになる」と述べている。「読売新聞」の社説も、「韓国には、朴時代の『維新体制』よりも一層激しい、『新維新体制』ともいうべき強権政治が再来する」と述べ、「わが国政府筋にも、この事態を、韓国民は『安定』を望んでおり、やむを得ない選択、と受け流そうとする向きがある。だが、民主的手続きを無視する強権政治で、真の安定が得られるだろうか」と指摘している。(世八六〇頁)

3-2 程度の概括的認識

程度を問いうる語句が当該文に含まれている場合、後続文にその程度が具体的に示されることが多い。程度を問いうる語句は典型的には形容詞であり、その意味では事態の概括的認識と重なるが、事態の概括的認識によって誘発される反問が「どう」であるのに対し、この程度の概括的認

識の反問は、「どのくらい」であるという点で異なる。また、実際に用例において、程度の概括的認識は、(3)のような「高い」「激しい」といった形容詞だけでなく、(4)のような「ずいぶん」「だいたい」といった副詞、(5)のような「極度」「大量」といった名詞にも見られた。

- (3) 北京までの道のりも遠かった。香港から国境深圳の長い橋を歩いて渡り、広州から北京までは汽車で五十八時間ほどかかったように記憶する。(世九二七頁)
- (4) 旅券の交付にはずいぶん手間どった。何度も外務省の窓口に出かけていったが埒があかなかった。(世九二七頁)

- (5) 裁判は公開とは名ばかりで、報道は極度に制限されている。一八日に、金大中氏が裁判を「政治的抑圧」として検事訊問を拒否したこと、一九日には、二カ月も地下室に閉じこめられ、連日一五時間も取り調べを受け、拷問されたにひとしいと述べ、暴力で政治転覆をはかったとの検察の主張を否定したこと、二五日は、すべては大統領選挙の準備であり、それが行われれば、勝利する自信があったのだから、どうして内乱をひきおこすと述べたことなどがよく外に伝わった程

度である。それも外国報道のみで、国内には一切報道されない。(世八五五頁)

3-3 多様性の概括的認識

「いろいろ」「さまざま」「まちまち」といった種類が多いということを示す語句は「たとえば」という反問を生みやすい。これらの語句は多様な例を背後にイメージできてこそ理解できるものであるが、多様な例を背後にイメージできるのは書き手の側だけであって、書き手が具体的な例を開示しない限り、読み手にはそうした多様な例を知りえないからである。(6)では、「多岐にわたっている」で種類が多いことを示し、それが具体的な例の開示を予測させている。

(6) 学歴という点からみても、日本のエコノミストは、「すこぶる多岐にわたっている。法学部出身のエコノミストは多いし、理学部出身のエコノミストも少なくない。」(世八一五頁)

3-4 相違の概括的認識

違うということを示す語句は、句の説明の予測を生み出す

しやす。というのは、違うというのは、何が違うかという面と、どう違うかという面があり、句の説明の予測を生み出す当該文は、何が違うかという面は描かれていても、どう違うかという面は描かれていないからである。(7)で言えば、工場の内部と外が違うこと、つまり何が違うかが描かれているだけで、どう違うということが描かれていない。そのことが「どう」の反問を誘発するのである。

(7) 裏門から外へ出たとき、そこは工場の内部と全く異なっていた。
遠く聞こえていた人と物のさわめきが、そこでは現

実の声となつて交錯していた。(何二八二頁)

3-5 変化の概括的認識

変わるということを示す語句も、違うということを示す語句と似た性格を持っている。すなわち、変わるといのは、何が変わるかという面と、どう変わるかという面があり、句の説明の予測を生み出す当該文は、何が変わるかという面は描かれていても、どう変わるかという面は描かれていないのである。(8)では、公共事業が票に結びつく意味が変わったことはわかるが、その意味がどう変わったかは

わからず、そのため、どう変わったかを後続文に求めていくことになる。

(8) 従来、公共事業が票に結びつくのは、道路や橋などの「出来あがった物」自体に対する謝礼という意味合いが強かった。しかし土建国家となった今は、表面的には相変わらずの結びつきに見えて、その意味は大きく変わったと言わねばならない。今では公共事業は「物」としての価値よりも、生活の基礎としての「仕事」としての値打ちが高いのである。(世九一九頁)

3-6 事態の概括的描写

3-1で見たように事態の概括的認識は形容詞や状態動詞によって示されるが、ここで説明する事態の概括的描写は出来事を表す動詞によって示される。段落が変わって新たな事態を提示するときに用いることが多く、(10)のように動詞述語文が倒置によって名詞述語文化されることが多い。反問は「どのように」、またはそれに類する形(「どんなふうに」「どのようにして」など)で誘発される。

(9) だが、まもなく荘重な儀式(＝葬儀)が世津子を取り囲むだろう。任地から呼び戻された夫は、暗い地下

室で妻と対面する。彼の同僚、世津子の知人、そして二人の親族が屍体となった世津子のまわりに集まり、またあわただしく去って行く。彼は恐らく世津子の傍で、夜を明かすにちがいない。出棺、茶毘、厳かな読経、甲いの花、甲いの音楽、焼香。彼は石灰になった妻を抱いて退場する。参列者がその後につづく。人気ない葬場の入口から、手拭を被った清掃夫が現われる。祭壇に近づき、花束を片づけはじめ。 (何二三五頁)

(10) 近代経済学者の発言が、わが国において、もつとも強い社会的影響力をもつたのは、昭和四〇年前後のことであつたろう。近代経済学の理論によつて裏うちされた発言は、その当時の「常識」からすれば、いちいち逆説的な含みをもつていた。世間一般の「常識」をくつがえす、経済学者の発言は、人びとの耳目をひきつけ、その首尾一貫した論理に、人びとは感服し、「常識のウソ」をいたく悟らされたものである。(世八一九頁)

また、「役割を果たす」や「影響を及ぼす」「効果を發揮する」といった機能的な意味を表す連語も説明文において句の説明の予測を引き起こすことが多い。

(11) 第一に、現実には日本の現状や政策を変える上で、

「横からの入力」——「海外からの政治的圧力」は極めてダイナミックにその効果を発揮したからである。八五年春からアメリカ議会等で数多く提出された保護主義法案の圧力が、六月末の「一八五〇品目の関税下げ・撤廃」、七月初めの「基準・認証、輸入手続き改善」政府調達」といった市場開放のための行動計画を次々と生み出していく有様は、その現実の効果はともかくとして、何が日本の政治のダイナミズムの源泉となっているかをまざまざと見せつけた。一〇月の「内需拡大に関する政策」以後も、内需拡大政策への外圧は止まるところがなく、中曽根内閣の看板である財政再建の死命を制するのは国内からの入力ではなく、「横からの入力」であることがますます明らかになっている。

(世九九九頁)

3-17 行動の概括的描写

事態の概括的描写と同様に、動詞によって表されるものに、行動の概括的描写がある。やはり、段落が変わって新たな事態を提示する際によく用いられ、倒置によって名詞

文化されることも多い。ただし、反問が「どうやって」で誘発されるという点で、事態の概括的描写とは異なる。

(12) たとえば貧しい青年と娘が好き合ったとき、どんな贈物をするだろうか。物は贈れなくとも、言葉を贈ることはできるだろう。ある日二人でどこかへピクニックに行く。美しい山があり湖がある。仮に——こんな言葉はギザに聞こえるかもしれないが——青年が恋人に向かつて、「今日のこの風景を君にあげよう」と言つたとする。その言葉が、娘にとっては永く忘れられない贈物として心に残るということは、ありうることである。(世七八三頁)

また、ある人物が何らかの動作をしていることはわかって、それが何のためになされているのかがわからないことがある。そのようなときはその人物の動作が概括的に描かれ、読み手はその動作の内実を後続文に予測することになるが、その場合、反問が、「どうやって」という、ある行為を前提とし、その行為の手段や方法を問うものではなく、「何をしているのか」という、行為そのものの意味を問うものになり、動詞に表れている行為そのものがまだ未分化であるという意味で、両者は区別すべきものであると

思われる。

(13) われに戻ると、麦藁帽の若者を交えた数人の男たちが、死体の積み重ねの前で忙しく立ち廻っていた。列の端から五つの躰が無造作に持ち上げられると、それぞれの穴の前まで、引きずられて行き、投げこまれた。薪を抱えた男が穴のまわりを行き来しながら、二三束ずつ分配すると、その後、続く男が、すでに死体にぶりかけてあった枯松葉に素早く点火して廻った。(何
 一四二頁)

(13)で言えば、「忙しく立ち廻っていた」という動作の内実が、死体を燃やすためのものであったということが後続文で示されている。

3-8 思考・伝達行為の概括的描写

思考・伝達行為の概括的描写は、行動の概括的描写に準じて考えることができる。ただし、誘発される反問が「どうやって」というより「どのように」という点で異なる点で区別できる。

(14) したがってしばしば、日本の状況を罵倒し、武士道の限界も指摘した。たとえば後者について次のように

記している。

「武士道」即ち日本の道徳にて十分である、これはキリスト教その者より高くして偉大である、と信ずることとは、誤謬である。それは此世の一つの道徳にすぎない。(中略)その美しさに拘らず、それは万邦無比の富士山のごとくである——万邦無比である、併し活動することなき死火山である」(世八七四頁)

なお、(15)のような、思考・伝達動詞の文において「を」や「と」のような内容を表す名詞や引用句が省略されている場合は、格成分の省略と考え、本稿では扱わない。石黒(二〇〇一c)を参照されたい。

(15) あるとき、ある学生が私に(ゆと)語った。

「私の知らないことばかりでおもしろい。昔の歴史と
いう感じね。」(世七六三頁)

3-9 事態の不定的認識

事態の不定的認識とは、3-6〜3-8で見た事態、行動、思考・伝達行為の概括的描写の反問部分が「どのように」「どうやって」「何をしている」のように不定語で具体的に表されているものことである。不定語で表されている以

上、後続文で必ず埋めなければならず、予測が義務的という点で他のものとは異なっていると考えられる。(16)では「どうしたら」がそれに相当する。

(16) やはり私たちがこうだと思っている日本と、外国から見る日本とは喰いちがつていろいろらしい。この喰いちがいをどうしたら小さくすることができのたろうか。七日の夜のB、B、Cや八日のザ・サンデイ・タイムズがそのヒントを与えてくれそうである。イギリス王室や政府が天皇の国葬に王族や政府高官を派遣したいという意向を洩らした途端、ケンケンゴウゴウの議論が始まったのだ。(中略)このように国民各層が思うところを存分に述べ合い、諸外国の動きも勘定に入れつつ、ゆっくりと議論をしばって行く。そしてそれぞれが少しずつ譲り合って結論を出す。ちよつと美化しすぎたかもしれないが、天皇敬慕の地ではこんな風に話が進んで行くように見えた。(世九六三頁)

3-10 一般的事態の提示

動詞の基本形によつて表される一般的な内容の文、野村(二〇〇〇)のいうところの総称表現は、具体的な内容を

導入するために提示されることが多い。したがって、当該文が一般的な内容を表す文であれば、そこで「たとえば」という反問が誘発され、後続文にはその一般的な内容を補完するような具体的な例が来ることになる。

(17) 何事によらずこの国では、コトバがひとり歩きして議論をわかりにくくする。「国連中心主義」ひとつを、どつても、そうだった。もうひとつだけ例をあげれば、日本国憲法を悪い憲法だとして非難するひとが「憲法をタブーにするな」というに至っては、日本社会の本当のタブーがどこにあるのかという問題を、はぐらかすものだった。(世九七八頁)

動詞の基本形だけでなく、「ことが多い」「ほとんどである」「傾向がある」などの形態で文の一般性が保証されていることもある。(18)では「場合が多い」に加えて、「一般的にいつて」も文の一般性を保証するように働いている。

(18) 一般的にいつて、意味の実質的な内容が明確でない、抽象的概念的な言葉だけを使って議論しても不毛な場合が多い。このことは防衛問題についてとくにあてはまる。(世八八六頁)

4 関係の漠然性によって生じる予測

1章で述べたように、事象の概括的把握だけでなく、関係の漠然性によって生じる句の説明の予測もある。一文の中の要素の結びつきが漠然としていて、書き手の言っていることがよくわからず、読み手の心内では、「どういこう」という反問が起きる。その場合、大きくは、書かれている内容が難解で解説を要する場合と、書かれている内容が比喩性を帯びていて説明を要する場合とに分かれる。そこでなされる予測は、いずれの場合も、3章で見たような当該文を具体化し、その内容を掘り下げる予測ではなく、当該文を読み手にとってわかりやすい別の表現にする言い換えの予測になる。

4-1 当該文が難解

当該文に書かれている内容が難解であると、読み手にとってはその内容を漠然としかつかむことができない。そのため、後続文に解説が必要となる。(19)では、「緊密な相似関係」というわかりにくい表現が「しっかりと生きていく」「反映されている」という両面から言い換えられるこ

とで表現がわかりやすくなっている。

(19) くりかえし述べたように、アメリカ人のコモン・セ

ンスと経済学の理論とは、緊密な相似関係にある。経済理論のABCは、アメリカ人の日常生活のなかに、しっかりと生きていく。また逆に、アメリカ人の生活感覚そのものが、経済学のなかに反映されているともいえる。(世八一六頁)

4-2 当該文が比喩的

個々の要素がわかりやすいものであっても、その要素の結びつきが比喩的であると、読み手としてはその内容を明確につかむところまではいたらない。そのため、後続文に説明が必要になる。(20)において、当該文から「われわれが使っている言葉は海面に出ているほんの一部に過ぎない」ということはわかるが、海面に出ている部分がかはわからない。したがって読み手としては、後続文でそのことについて詳しく説明されるのを期待するのである。

(20) つまり、われわれが使っている言葉は氷山の一角だ
ということである。氷山の海面下に沈んでいる部分
はなにか。それは、その言葉を発した人の心にほかなら

ず、またその心が、同じく言葉の海面下の部分で伝わり合う他人の心にほかならない。私たちが用いている言葉は、心のそういう深部をほんのちよっぴりのぞかせる窓のようなものであつて、私たちはそれをのぞきこみながら相手の奥まで理解しようとしたえず努めているのである。(世七八七頁)

比喩というものは事象を概括的にとらえる一つの方法であつて、その意味で4-1の書かれてある内容が難解なものよりも、3章の事象の概括的把握に近いと思われる。

要素の結びつきが比喩的なものばかりでなく、文そのものの意味が比喩的なために引き起こされる予測もある。(2)の場合、文そのものの意味が比喩性を帯びていることがクオーテーション・マークによって保証されている。

(2) 前の養父が熱心に探し廻つていてというので、五カ月ほど安全なところへ避難しているあいだに、前の養父と新しい養父とのあいだで、話がついたときいた。金銭上の解決がついて、ここでも、彼女はふたたび金で転買されたものと思われる。(世九三八頁)

また、(2)のような象徴的な表現は一般的な比喩よりも表現が難しく、その意味で4-1の書かれている内容が難解

なものに近づいていく。

(2) 彼によれば「日本国は精神にして、ソールなり」(「日本」一九〇一年)であつた。日本の存在の根源と、いつてもよいであろう。それは現実の日本というより、内村によつて思われた日本、「理想」化された日本であつた。(世八七四頁)

5 おわりに

以上述べてきたことから、本稿の主張は以下のようにまとめられる。

①句の説明の予測には、事象の概括的把握によつて生じる予測と、関係の漠然性によつて生じる予測がある。

②事象の概括的把握によつて生じる予測は事象を大雑把に捉えることによつて生じる予測であり、読み手はその具体的に掘り下げられた内容を後続文に期待する。

③関係の漠然性によつて生じる予測は一文の中の要素の結びつきが漠然としていることによつて生じる予測であり、読み手はわかりやすく言い換えられた内

容を後続文に期待する。

事象の概括的把握によつて生じる予測、関係の漠然性によつて生じる予測、それぞれの下位類型は左のようになる。

事象の概括的把握	当該文から誘発される反問	予測を誘発する典型的なマーカー
事態の概括的認識	どう	感情、属性を表す形容詞
程度の概括的認識	どのくらい	程度を表す形容詞
多様性の概括的認識	たとえば	「いろいろ」「さまざま」「まちまち」
相違の概括的認識	どう(違う)	「違う」「異なる」
変化の概括的認識	どう(変わる)	「変わる」「変化する」
事態の概括的描写	どのように	出来事を表す動詞
行動の概括的描写	どうやって	行動を表す動詞
思考・伝達行為の概括的描写	どのように	思考・伝達動詞
事態の不定的認識	不定語の形態による	不定語
一般的事態の提示	たとえば	動詞の基本形
関係の漠然性	当該文から誘発される反問	予測を誘発する典型的なマーカー
当該文が難解	どうということ	難解な語句
当該文が比喩的	どうということ	異例結合の名詞文「よう」「みたい」

資料

(何) 大江健三郎編 日本ペンクラブ選 (一九八三) 『何

とも知れない未来に』集英社文庫

(世) 『世界』主要論文選編集委員会編 (一九九五) 『世

界』主要論文選』岩波書店

参考文献

庵功雄 (一九九九) 「テキスト言語学の観点から見た談

話・テキスト研究概観」『言語文化』36 一橋大学語学研

究室

石黒圭 (一九九六) 「予測の読みー連文論への一試論ー」

『表現研究』64

—— (一九九八 a) 「理由の予測ー予測の読みの一側

面ー」『日本語教育』96

—— (一九九八 b) 「逆接の予測ー予測の読みの一側

面ー」『早稲田日本語研究』6

—— (一九九九) 「並立の予測ー予測の読みの一側面ー」

『国語学 研究と資料』23 国語学 研究と資料の会 (早稲

田大学)

—— (二〇〇一 a) 「予測と笑いー予測を外すレトリック

クー」『表現研究』73

—— (二〇〇一 b) 「ショートショートに見る予測の読

みー文章全体の構成を視野に入れた予測ー」『国語学 研

究と資料』24 国語学 研究と資料の会 (早稲田大学)

—— (二〇〇一 c) 「格成分の説明の予測ー予測の読み

の一側面ー」『一橋大学留学生センター紀要』4

大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊

子・郭末任・許夏珮・長友和彦 (一九九六) 「予測文法

研究ー後統文完成課題から見た日本語母語話者と日本語

学習者の予測能力についてー」『日本語教育』91

酒井たか子 (一九九五) 「文の適切性判断のための一試

案ー後統文完成問題における日本人との比較ー」『筑波

大学留学生センター日本語教育論集』10

杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子 (一九九七) 「読解に

おける日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日

本語教育』92

寺村秀夫 (一九八七) 「聴き取りにおける予測能力と文法

的知識」『日本語学』6・3 明治書院

野村眞木夫 (二〇〇〇) 『日本語のテキストー関係・効

果・様相ー』ひつじ書房

(一橋大学留学生センター専任講師)